

第2章 筑後国府跡をとりまく環境

本章では、本市の人口や産業、交通などの概要、地形や気象などの自然環境、原始から現代までの歴史環境について、筑後国府跡をとりまく環境として整理する。

第1節 久留米市の概要

1. 久留米市の位置

筑後国府跡のある本市は、福岡県南西部、東経135度30分、北緯33度19分に位置する。平成17年（2005）2月の広域合併により、市域は東西32.27km、南北15.99kmを測り、行政面積は229.84k㎡に拡大した。結果、東はうきは市、西は佐賀県、北は朝倉市と大刀洗町・小郡市、南は八女市と広川町に接する（図2-1-1）。平成20年（2008）4月には中核市に移行し、現在は福岡県南地区の中心都市としての機能を果たしている。

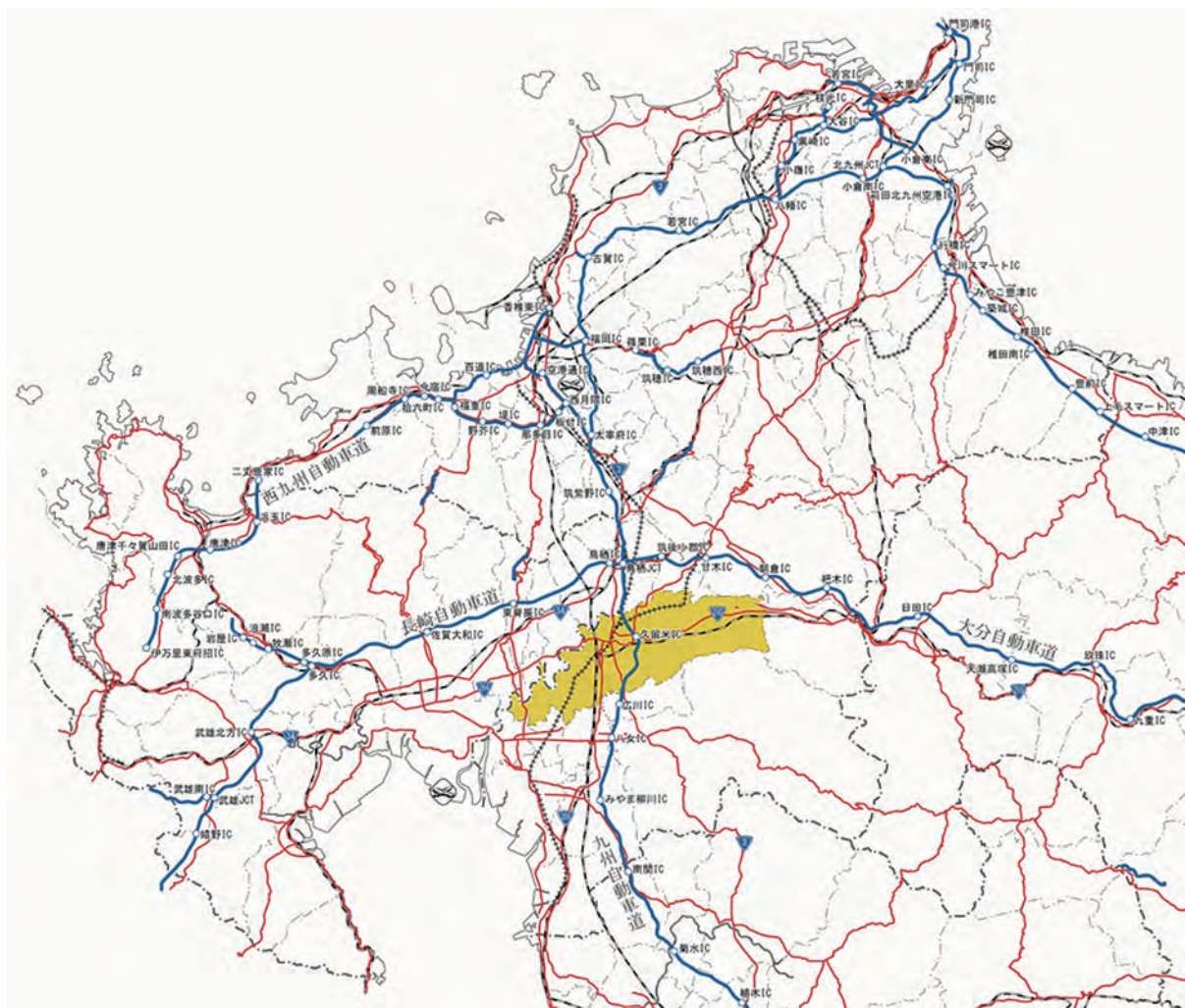


図 2-1-1 久留米市位置図

2. 人口と世帯

本市の人口は、大正9年（1920）以降、一貫して増加が続いていた。しかし、少子化や市外への転出などの影響により、平成17年（2005）の306,434人をピークに減少に転じ、令和元年（2019）6月時点で305,403人を数え、今後は、本市も人口減少社会を迎えることになる。

人口増加のスピードが鈍化する中、核家族化や単身世帯の増加等を背景に、世帯数は増加が続いており、令和元年6月時点で135,650世帯となっている（図2-1-2）。

1世帯あたりの人員は、核家族化等の影響により減少傾向が続いている。昭和25年（1950）時点では1世帯あたり5.7人であったが、令和元年6月時点で2.3人まで減少している。

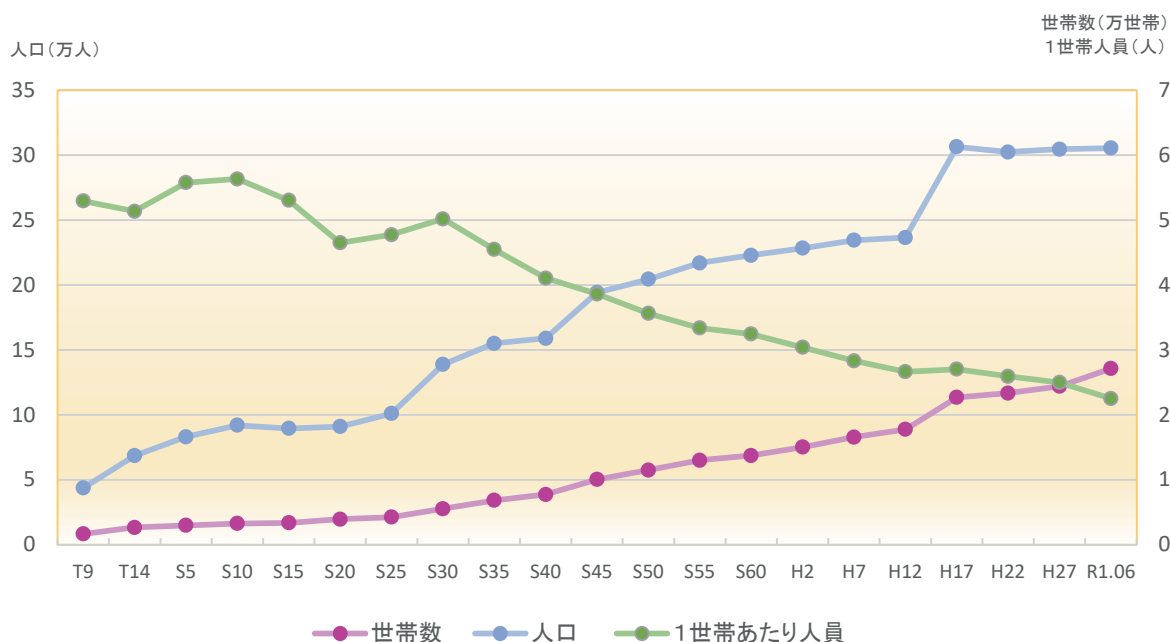


図2-1-2 人口世帯数の推移

3. 産業

平成27年（2015）の国勢調査によれば15歳以上の就業人口141,546人に占める第1次産業の割合が5.5%、第2次産業の割合19.3%、第3次産業の割合が69.8%、分類不能産業が5.4%となっており、第1次・第2次産業の割合が減少傾向にある一方で、第3次産業が一定数を維持している。なお、第3次産業の中では卸売・小売業と医療・福祉関連の就業者数が多く、近代以降の商都、医療の町としての本市の特性が現在も息づいていることがわかる。

なお、本市は肥沃な土壌と豊富な水などを背景として農業が盛んであり、特筆に値する。就業人口の減少は見られるが、平成28年（2016）市町村別農業産出額（農林水産省公表値）をもとにした試算によると、本市の年間農業産出額は324.7億円にのぼり、県内で1位、九州沖縄で10位となっている。

4. 交通

市内には九州の大動脈である九州自動車道と国道3号が縦断し、加えて209号・210号・264号・322号と多くの国道が通っている。また、JR線は鹿児島本線と久大本線、加えて平成23年(2011)3月に全線開業した九州新幹線や、西鉄天神大牟田線が市内の中央部を走る(図2-1-3)。このように本市は周辺市町村のみならず、九州における広域交通ネットワークの結節点に位置しており、九州各都市へ短時間で到達できる恵まれた交通環境を有している。また、九州自動車道、国道3号・210号等の幹線道路は緊急輸送道路に指定され、大規模災害時における救助・救援活動や緊急物資輸送等の機能を担っている。

また、本市では自転車が似合うまちづくりの一環としてコミュニティサイクル「くるクル」を導入しており、市民や観光客のまちなかの回遊を促進している。



図 2-1-3 交通網図

5. 観光

本市には、筑後川や耳納山地に育まれた豊かな自然をはじめ、歴史や文化、食など様々な魅力がある。最近10年間の観光入込客数は、道の駅くるめのオープンなどを契機として、平成20年(2008)に初めて500万人を越え、平成23年には九州新幹線開業効果もあり530万人に達している。その後も510万人から540万人ほどで推移し、平成29年(2017)には591.2万人を記録した。目的別観光入込客数を見ると、全体の半数以上にあたる309.1万人が歴史・文化を目的としている。

第2節 自然環境

1. 地形と地質

筑後国府跡は、筑後川の中流域、両筑平野の南西部に発達した段丘上に立地し、遺跡の南東には耳納山地が控えている。

筑後川は阿蘇外輪山に源を発し、日田盆地で周囲の小河川を吸収して大河へと成長する。その後、西へと流れ出し、福岡県内に至って平野を形成しつつ、市街地の北西付近で流れを南西へと転じ、福岡・佐賀県境を曲流して有明海へと注ぐ九州一の大河である。

この筑後川の開析・堆積作用や有明海による堆積作用により、筑後川の中・下流域に形成された広大な沖積平野が、筑紫平野である。筑紫平野は有明海沿岸部から本市西部にかけての平野を筑後平野・佐賀平野、本市東部から浮羽・朝倉地域までの平野を両筑平野と呼び分けることがある。これは筑紫平野の北を画する脊振・古処山系から南に向かって派生した段丘と、南を画する耳納山地から北に向かって派生した段丘とが、市街地付近へ向かい合うように延びて地峡帯を形成し、筑紫平野を東西に分断している地形的特徴によるものである。

耳納山地は東西 30 km におよび、東に聳える鷹取山（標高 802 m）を最高所とし、発心山（標高 698 m）、耳納山（標高 368 m）、高良山（標高 312 m）と西へ行くに従い比高を減じ、狭小な扇状地を経て、市街地付近では地峡帯を形成する段丘へと派生する。山岳部の大部分は砂質準片岩、泥質準片岩、緑色準片岩、緑色片岩などからなる古生代の筑後変成岩を基盤とし、山岳部の東側には花崗岩も見られる。台地を構成する新生代砂礫層は耳納山地北麓と南西付近に分布し、同時代の頁岩、砂岩、凝灰岩は山地の西側に認められる（図 2-2-1）。

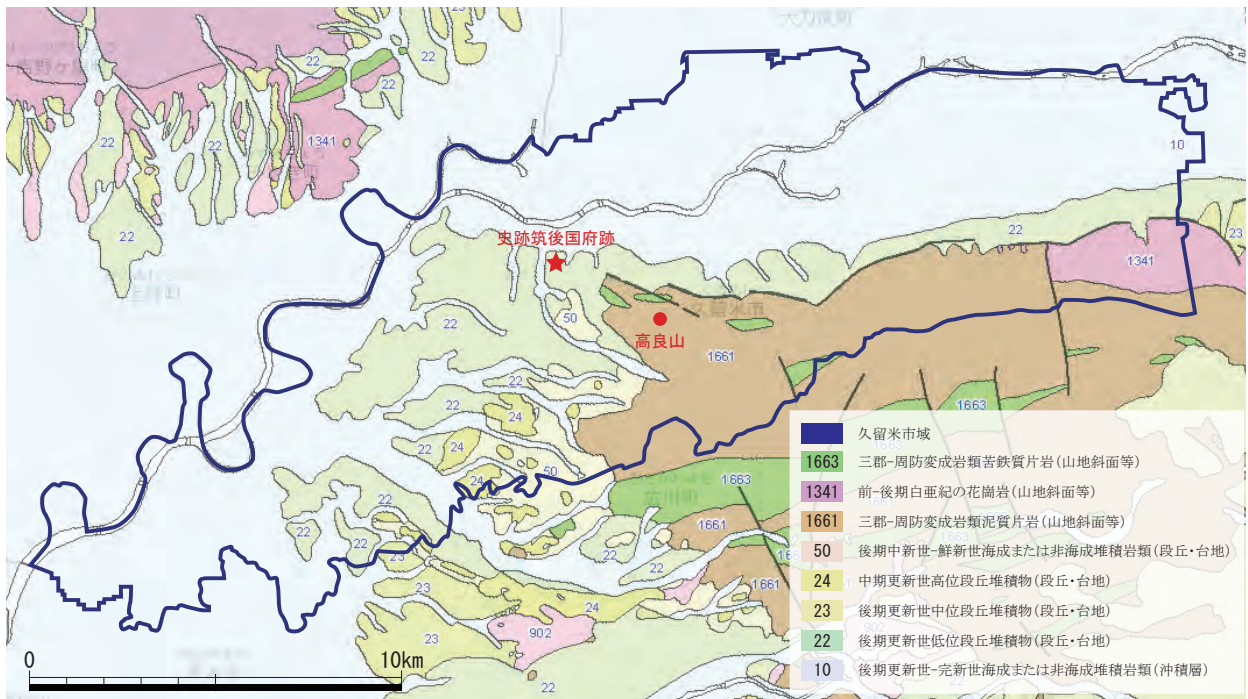


図 2-2-1 久留米市地形・地質図

(産業技術総合研究所地質調査総合センター「20 万分の 1 日本シームレス地図」一部改変)

このように、筑後川によって形成された自然堤防や微高地、また、耳納山地の扇状地、段丘の形成など、生活・交通の便に恵まれた立地条件と自然環境を具備するこの地には、多くの遺跡が展開している。

筑後国府跡もその一つで、高良山から北西へ派生した段丘上、通称枝光台地に立地する。段丘の中央からやや南よりには水縄断層帯が東西にのび、断層崖を形成している。その結果、段丘を南北に分ち、崖下にあたる北側には標高 10 m から 20 m ほどの低位段丘が、崖上にあたる南側には標高 30 m 前後の中位段丘が広がる。この低位段丘上に前身官衙、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期政庁、国司館および在国司居屋敷が、中位段丘上にⅣ期政庁が位置している（図 2-2-2）。



図 2-2-2 筑後国府跡航空写真

2. 気象

本市の気候は内陸型の有明海気候区に属し、年間平均気温は 16.3℃、年間降水量は 1,919.4 mmで福岡県内では暖かく雨の多い地域であるが、夏と冬の気温格差は比較的大きい。降雨量は梅雨時期に集中しており、これまでも時おり大雨による災害が発生している。昭和 28 年（1953）には筑後地方を記録的な大雨が襲い、未曾有の被害をもたらした。合川町付近の堤防が決壊し、市街地の 80%を水没させた。

近年、筑後国府跡は幸いにも大きな被害は受けていないものの、最大規模の降雨（810mm/48 時間）により筑後川が氾濫した場合、前身官衙地区・Ⅱ期政庁地区・国司館地区は浸水想定区域に該当している。

3. 動植物

本市は筑後川と耳納山地に代表される水と緑に囲まれた環境にあり、そこで育まれた動植物も多い。筑後国府跡が所在する合川町付近もまた、筑後川に近接し、高良山の眼下に立地していることから、それらに触れ合う機会に恵まれた環境下にあるといえる。

筑後川中流域には、水際にエビモ、ヤナギモなどの沈水植物、ヤナギタデ、ミゾソバなどの湿性植物、低水敷にツルヨシ群落、高水敷にはオギ群落が広く分布し、水際の植生も多様である。高水敷には九州北部では希少なセイタカヨシ群落も分布している。また、河岸にはオオタチヤナギ、エノキなどの高木が点在する。河床には、早瀬で産卵するアユ、アリアケギバチ、緩流域を好むウグイ、ギンブナ、オイカワ（図 2-2-3）などが生息し、抽水植物に産卵するオヤニラミ、抽水・沈水植が繁茂する場所には、キイロカワカゲロウなどが観察できる。陸域では、河岸の崖に営巣するカワセミ、礫河川で繁殖するコアジサシ、ツバメチドリなどの鳥類、オギなどの高木敷のイネ科植物に巣を作るカヤネズミなどの哺乳類などが確認されている。

高良山はコジイを主体とする常緑高木林で覆われているが、一部には常緑高木林のシイ林の自然植生やクスノキ人工林が見られる。また、シダ植物の宝庫でもあり、ここを基産地とする種にコウラカナワラビがある。国指定天然記念物であるモウソウキンメイチク（図 2-2-4）や県指定天然記念物である大樟、さらに、市指定天然記念物であり、市花でもあるツツジの群生地も見られる。昆虫ではクロセセリ、メスアカムラサキ、サツマニシキ、ヒメクダマキモドキなどが生息し、鳥類ではオオタカ、ハヤブサ、エナガ（図 2-2-5）など 104 種の鳥類が観察できる。哺乳類は 16 種が生息しており、高良山鳥獣保護区が指定されている。



図 2-2-3 オイカワ



図 2-2-4 モウソウキンメイチク

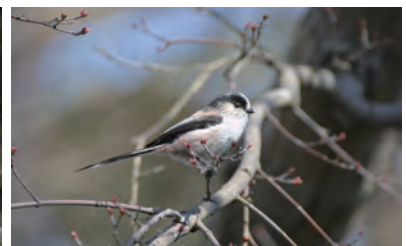


図 2-2-5 エナガ

第3節 歴史環境

1. 歴史の変遷

(1) 原始（旧石器時代から古墳時代）

①旧石器時代

本市では、二万年以上前の後期旧石器が30点以上発見されており、この頃から人々の暮らしが始まったことがわかる。発見地は標高5mから60mの丘陵・低台地上に分布し、特に上津荒木川の上・中流域、高良山北西麓から筑後川に向けての低台地上からの出土が多い。

②縄文時代

縄文時代の遺跡は、耳納山地西側を中心に多く分布し、人々の活動痕跡がより明瞭となる。筑後国府跡の南東部、断層崖上にあたる横道遺跡（御井町）は、草創期まで遡る。筑後地域で最古段階に位置付けられる隆起線文土器をはじめ、後期を除く全時期の遺物が出土し、集石遺構や焼土遺構も検出された。一方、断層崖下には朝妻遺跡（前・後期、朝妻町）・上遺跡（早・晩期、東合川町）をはじめ、神道遺跡（後・晩期、御井旗崎）・へボノ木遺跡（早期から晩期、東合川）・水洗遺跡（前期、東合川町）・西小路遺跡（後・晩期、東合川町）などが発見され、時期を違えて居住域が点々と移り変わる様子が窺える。この他、編みカゴ（図2-3-1）が出土した正福寺遺跡（後期、国分町）や、野口式土器（図2-3-2）の標識遺跡である野口遺跡（前期、山川野口町）など全国的にも著名な遺跡が発見されている。

縄文時代の遺跡から出土した遺物の中には、西九州地方の影響を受けた土器や瀬戸内地方を中心に分布する土器、また、腰岳（佐賀県伊万里市）・姫島（大分県国東半島沖）で産出される石材を使った鎌などが見られ、該期から他地域との交流が窺える。

③弥生時代

旗原遺跡（荒木町）など筑後川支流の広川下流域からは早期の土器が出土し、大陸や半島から稲作文化が伝わったことが推察される。その後も海外との交流は続き、久保遺跡（城島町）では前期末から中期の朝鮮系無文土器（図2-3-3）が出土した。また、新府遺跡（東合川）では小銅鐸鑄型が発見され、金属器生産技術が伝えられたことが判明している。



図 2-3-1 編みカゴ（正福寺遺跡）



図 2-3-2 野口式土器（野口遺跡）



図 2-3-3 朝鮮系無文土器（久保遺跡）

中期には高良山西麓の台地上に比較的多くの集落が見られる。二本木遺跡（御井町）やへボノ木遺跡では丹塗り土器を伴う焼失建物が多数検出された。また、前者については幅7mの大溝を有す環濠集落と考えられ、後者では後期の楽浪系土器も発見されている。

終末期には筑後川沿いに拠点的な集落と考えられる水分遺跡（田主丸町）・良積遺跡（北野町）・道蔵遺跡（大善寺町）が分布する。計画対象範囲内の古宮・大林地区でも集落跡が確認され、長さ300m以上に及ぶ大溝と100軒以上の竪穴建物群などが検出された。

これらの拠点集落からは、広形銅矛耳・辰砂・豊前系土器・肥後系土器（水分遺跡）、青銅鏡・有肩袋状鉄斧・山陰系土器・畿内系土器（良積遺跡）、青銅製鉈・三韓土器（道蔵遺跡）、肥前型器台（良積・道蔵・大林遺跡）などが出土している（図2-3-4、図2-3-5）。

以上のように、弥生時代には国内のみならず大陸や半島との交流・交易も活発となる。このことは、筑後川を抱く本市の地理的特徴に起因するものと思われる。

④古墳時代

高良山麓は、市内でも最古級の古墳が営まれた地域で、方形の墳丘を持つ祇園山古墳（御井町）は、石棺内部から三角縁神獣鏡が出土したと伝えられる。この頃の集落としては、首長居館の可能性もある市ノ上東屋敷遺跡（合川町）などが著名である。市西部の三瀦地域には、『日本書紀』にその名が見える水沼君の墓所とされる御塚・権現塚古墳（大善寺町、図2-3-6）がある。同古墳からは新羅土器（図2-3-7）が出土しており、大陸や半島との交渉に関わっていた可能性が窺える。また、有明海沿岸地域との古墳文化の共通性を示す、装飾や石棺、初期横穴式石室などを有する古墳も多く、広域な地域豪族連合が形成されていたと思われる。6世紀前半にその盟主と仰がれた筑紫君磐井は、527年にヤマト王権と御井郡（御井町付近）で交戦し、翌年敗北したことが、『日本書紀』などに記されている。

隈山古墳群（国分町）・大谷古墳群・岩竹古墳群（以上、御井町）の調査においては、周辺では出土しえな



図 2-3-4 鉄製品（良積遺跡）



図 2-3-5 三韓土器（道蔵遺跡）



図 2-3-6 国指定史跡御塚・権現塚古墳



図 2-3-7 新羅土器（御塚古墳）

い銀製山柵玉（図 2-3-8）・金銅製飾り金具・権を確認しており、磐井の乱が契機となって王権による当地域の支配強化が進んだと考えられる。このことは地勢上の重要性と相まって、当地域が筑後地方における地方支配の拠点として発展していく要因となる。

なお、計画対象範囲においてこの時代の遺構は、ほとんど確認されていない。竪穴建物が三反野地区や田代地区、南地区や大林地区で検出されるが、それ以外の遺構については未検出であり、現時点では小規模な集落の存在が想定される。



図 2-3-8 銀製山柵玉（隈山 2 号墳）

（2）古代（飛鳥時代から平安時代）

①飛鳥時代

7 世紀は激動の世紀と呼ばれ、中国を統一した唐が周辺諸国への軍事介入したことから、東アジア情勢が不安定化した。朝鮮半島では唐と新羅が百済を滅ぼし、友好国百済を救済するため斎明天皇は出兵を決定し、朝倉宮（朝倉市）入りした。663 年の白村江の戦いで大敗北を喫したヤマト王権は、更なる国土防衛の必要性に迫られた（図 2-3-9）。この頃、王権によって整備されたのが、神籠石をはじめとする朝鮮式山城である。本市には、高良山神籠石（御井町、図 2-3-10）、上津土塁跡（上津町）、筑後国府跡前身官衙（合川町）が築かれた。

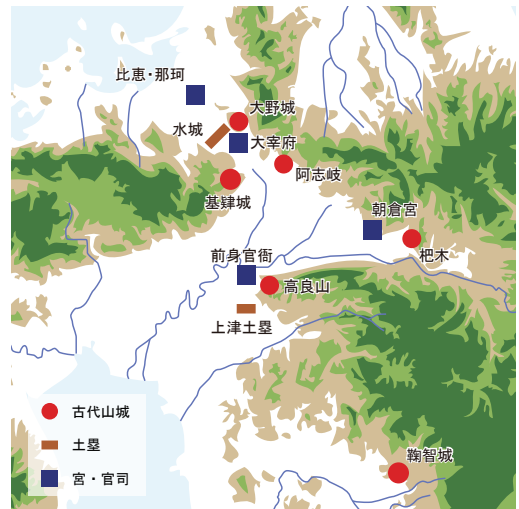


図 2-3-9 軍事施設等位置図
（7 世紀第 3 四半期頃 第 4 回神籠石サミット
久留米大会吉村靖徳資料転載。一部改変。）

また、『日本書紀』天武七年条に見られる筑紫大地震の震源が水縄断層系であったことが、山川前田遺跡（山川町、図 2-3-11）の発掘調査成果などから判明している。なお同記事は、日本最古の地震記事としても知られている。



図 2-3-10 国指定史跡高良山神籠石



図 2-3-11 国指定天然記念物
水縄断層（山川前田遺跡）

②奈良時代

中央集権化を進める政府は、律令国家の成立に伴い地方の行政区分を行った。地方支配の基本単位は国で、7世紀末に筑紫国から筑後国が分割されると、前身官衙跡地に筑後国府が設置された。同時に、大宰府と九州各地の国府を結ぶ幹線道路である西海道が整備された(図2-3-12)。この遺構も本市では複数箇所を確認されている。8世紀はじめの大宰府の成立を受けて、筑後国府もⅡ期政庁が新造され東へ移転した。このころ、国分寺建立の詔によって筑後国分寺と国分尼寺(国分町)も造営され、合川町から国分町にかけては、古代筑後国の政治・経済・文化の中心地として発展することになった。

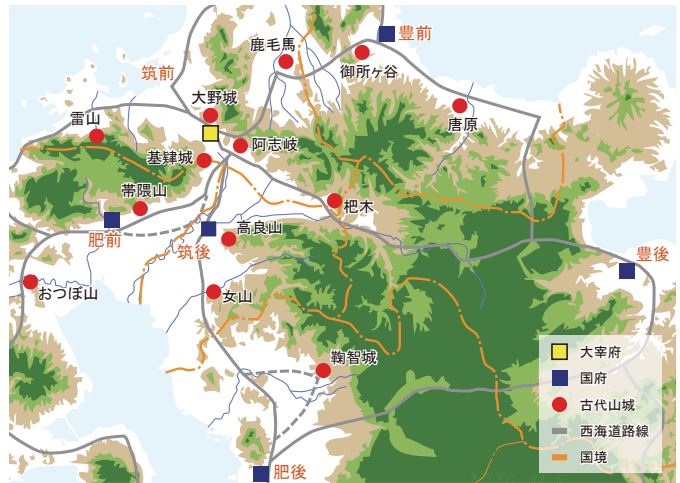


図2-3-12 国府・古代山城と西海道路線図
(第34回久留米の考古資料展掲載図面を転載。一部修正。)

③平安時代

天候不順による不作が続く中、筑後国府跡Ⅱ期政庁、筑後国分寺はじめ、高良山高隆寺の大改築など数多くの公共工事が実施された。筑後国守に赴任した都朝臣御西は、悪化した財政の改革を行おうとするが、元慶7年(883)、自分の部下らを含む新興勢力の富豪の輩によって殺害される事件が起こる。その舞台である国司館が、合川町の筑後国府跡で発掘されている。

天慶2年(939)に勃発した藤原純友の乱によって、大宰府とともにⅡ期政庁も焼失したとされている。このため政庁は朝妻町に移転再建されるが、このⅢ期政庁の空間規模は他国に例がないほど大規模なものであることが判明している。また、乱のため焼失した神名帳に代わり作成された新神名帳の控えが高良大社に残されている。現存する日本最古の神名帳であるが、この中に、玖留見神の名が見え、これを久留米の地名起源とする説がある。

11世紀後半になるとⅢ期政庁は断層崖上の横道地区へと移転する。『高良記』には延久5年(1073)に「今ノ符」に移ったとあり、これをⅣ期政庁に比定している。Ⅳ期政庁の移転とともに、高良山西麓には集落が形成されはじめており、二本木遺跡はその代表例である。

(3) 中世(鎌倉時代から安土・桃山時代)

①鎌倉時代

文治2年(1186)、草野氏が筑後国在国司・押領使に任じられたことが『吾妻鏡』に見える。同氏は竹井城(草野町)に拠点を置き、城下町を整備し、古社寺だけでなく積極的に新興仏教勢力を保護した。代表的なものに臨済宗千光寺(現曹洞宗、山本町)や浄土宗善導寺(善導寺町)の建立がある。元寇襲来の際も、草野氏は小船で蒙古軍と戦い、神代氏は筑後川を渡河する肥薩勢のために浮橋をかけるなど、筑後勢の活躍が知られている。

この時期、断層崖下の計画対象範囲内では、新たな土地利用がなされていく。葉山・天神木地区では、12世紀以降に掘立柱建物や区画溝、道路跡などが相次いで営まれ、13世紀前半まで

築地や土塁に囲まれた施設が維持された。その後は墓地としての土地利用がなされることが判明している。また、断層崖上に営まれたIV期政庁も12世紀後半には機能を停止し、以後、高良山麓の筑後府中が大いに発展している状況が看取される。二本木遺跡や安養寺境内遺跡(御井町)などでは、物資の集積施設と見られる地下倉庫跡が発見され、輸入陶磁器の出土量も市内で群を抜いている。常滑焼大甕や東播系こね鉢など国産広域流通品や銭貨も多く出土し、府中は筑後地域における物資の集積地としての様相を呈す。

②室町時代

南北朝期の本市は、北部九州支配の要衝として重要な位置を占めた。筑後を制圧した征西將軍宮懐良親王が高良山に在陣し、毘沙門岳城や杉城が南朝方の拠点となっている。また、『豊後入江文書』には、正平6年(1351)に親王が国府に陣した記事が見える。

正平14年(1359)に現在の宮ノ陣町から小郡市南部一帯を舞台に「大保原の戦い」が勃発し、その2年後に南朝方は大宰府に入り、征西府を樹立した。その後、九州探題の今川了俊が九州入りすると状況が一変し、再び高良山に拠点を移した。また、永正年間(1504から1521)には、高良山の支城として笹原城(後の久留米城)が築造されている。

合川町の立石地区および上地区においては、中世の遺構・遺物が多く発見されている。立石地区には一町四方を土塁で囲んだ区画施設が存在する(図2-3-13)。区画内部の状況は調査の進展を待たなければならないが、区画外部では、その東側を中心に13世紀から15世紀にかけての大小多様な溝、井戸、粘土採掘坑、土坑などが営まれている。一方、筑後府中は、『高良記』によると上町・下町の2町からなり、主な町並みが高良社の祭礼に因んだ名称で呼ばれていたという。また、五の日の三斎市が行われ、秤屋・油屋・土器屋・金屋・銀屋・鍛冶屋・番匠などが高良社へ奉仕するとともに、それぞれの商品を市で販売していたものと思われる。前時代に引き続き、府中は高良社の門前町として大いに繁栄していた様子が窺える(図2-3-14)。



図 2-3-13 立石土塁



図 2-3-14 絹本着色高良大社縁起
(山内図、久留米市編『郷土の文化財』より抜粋)

③安土・桃山時代

戦国時代には、本市を含む筑後国は主に豊後の大友氏の勢力下であり、在地土豪は、派遣された代官の下に割拠しており、大きい勢力とはならなかった。

時期によっては、周防の大内氏、肥前の竜造寺氏、薩摩の島津氏が侵入し、その勢力争いの場となっていた。しかし、天正15年(1587)には豊臣秀吉がついに九州を平定した。国割により、

久留米城に入城したのは毛利秀包である。秀包はキリシタン大名として知られ、城下に教会を建設したといわれている。市役所庁舎建設に伴う久留米城下町遺跡（両替町）の発掘調査では、聖堂と推定される建物遺構とキリシタン関連遺物が発見されている。

（４）近世（江戸時代）

①田中氏代

関ヶ原の戦いの後、慶長6年（1601）に田中吉政が筑後30万石の太守に封じられた。吉政は柳川城を本城としたが、久留米城には次子則政を配置し、両城間を結ぶ柳川往還を建設した。また、城下町や道路交通網、河川・堤防の整備、新田開発などを積極的に進めた。しかし、二代忠政には嫡子がなく、元和6年（1620）に田中家は断絶した。

②有馬氏代

元和7年（1621）、丹波福知山から有馬豊氏が久留米城に入城し、筑後北半21万石を領した。豊氏は荒廃した久留米城の全面修築と拡張、城下町の拡張整備を進めた。城郭については、筑後川に面した小丘にある本丸を東から南向きに改造し、城の西・北・東の三方が筑後川や湿地帯に囲まれていたため、本丸から南方へ二ノ丸・三ノ丸・外郭を連ねた連郭式の構造とした（図2-3-15）。城郭の南面には侍屋敷群や寺町が取り巻き、防御を固めている。城と併行して、武家屋敷や町屋の建設も進められ、一応の完成を見たのは明暦元年（1655）頃である。また、城下の西側には筑後川の川港である瀬下町があり、南側からは柳川往還、東側からは日田街道が延びるなど、水陸交通網の整備も進めている。



図2-3-15 久留米城本丸（現在）

一方、中世以来、高良山の麓にあって門前町として栄えた筑後府中は、薩摩坊ノ津街道が整備されるとともに、宿場町としての機能を担うことになる。2代藩主忠頼による大鳥居の寄進や3代藩主頼利による本殿の造営など、歴代藩主に厚く庇護された高良社とともに、大いに発展した。なお、計画対象範囲内では、遺構の検出例は少ないが、東地区で井戸、溝、土坑が発見され、近世枝光村に関わるものと考えられる。

（５）近代（明治時代から戦前）

明治4年（1871）の廃藩置県で久留米藩は久留米県となり、同年11月には柳川県・三池県と合併して三潞県が成立した。県庁は若津に設置され、明治5年（1872）に旧久留米藩御使者屋（現両替町公園）に移転した。明治6年（1873）1月の「廃城令」により久留米城は正式に廃城となった後（図2-3-16）、同9年（1876）には福岡県と合併した。



図2-3-16 久留米城本丸（明治初期）

明治22年（1889）4月、他30市とともに市制が施

行され、旧城下を範囲として久留米市が誕生した。また、旧京隈侍屋敷のほぼ中央部を縦断する形で九州鉄道が敷設され、翌年（1890）3月には、久留米停車場が開業した。

日清戦争後の軍拡政策により、明治30年（1897）に陸軍歩兵48連隊が移駐したことを皮切りに、軍の関連施設が次々に建設され、本市は軍都としての側面を持つようになった。現在でも市内では多くの戦争遺跡を見ることができる（図2-3-17、図2-3-18）。

昭和20年（1945）8月11日の午前10時16分、本市の市街地は、沖縄の読谷村から飛び立った米陸軍第7航空軍のB24重爆撃機53機によって、無差別焼夷弾攻撃を受けた。投下された500ポンド焼夷弾は計636発15tにも上った。死者214名以上、重軽傷者160人を出し、市街地の60%から70%が焼失し、街は灰燼に帰した。

（6）現代（戦後から現在）

終戦を迎え、進駐した連合軍により、市内各兵営に保管されていた武器類が接収された。軍の残務の引継ぎが一段落すると、久留米師管区司令部は、解隊式を行い、軍都としての歴史は、一旦、幕を下ろした。その後、軍の関連施設の跡地は学校や耕作地として利用されていく。

昭和30年代に入り、日本の経済も立ち直りを見せ始め、いわゆる岩戸景気と呼ばれる好景気に入り、本市も赤字財政から脱した。その間、昭和26年（1951）には、合川町、山川町、上津荒木村が本市に編入されている。

昭和40年代になると高度成長期に入り、昭和45年（1970）に九州自動車道の工事が始まり、昭和48年（1973）に開通した。久留米インターチェンジに近い合川町東部では、工業団地の造成や地場産くるめ（物産館）が建てられ、かつての田園風景から様変わりして店舗や工場が集中する地域となっていった。

平成17年（2005）に三井郡北野町、三潞郡三潞町、三潞郡城島町、浮羽郡田主丸町と合併し、人口が30万人を突破したことから、平成20年（2008）には九州初の県庁所在市以外の中核市となり、現在に至っている。



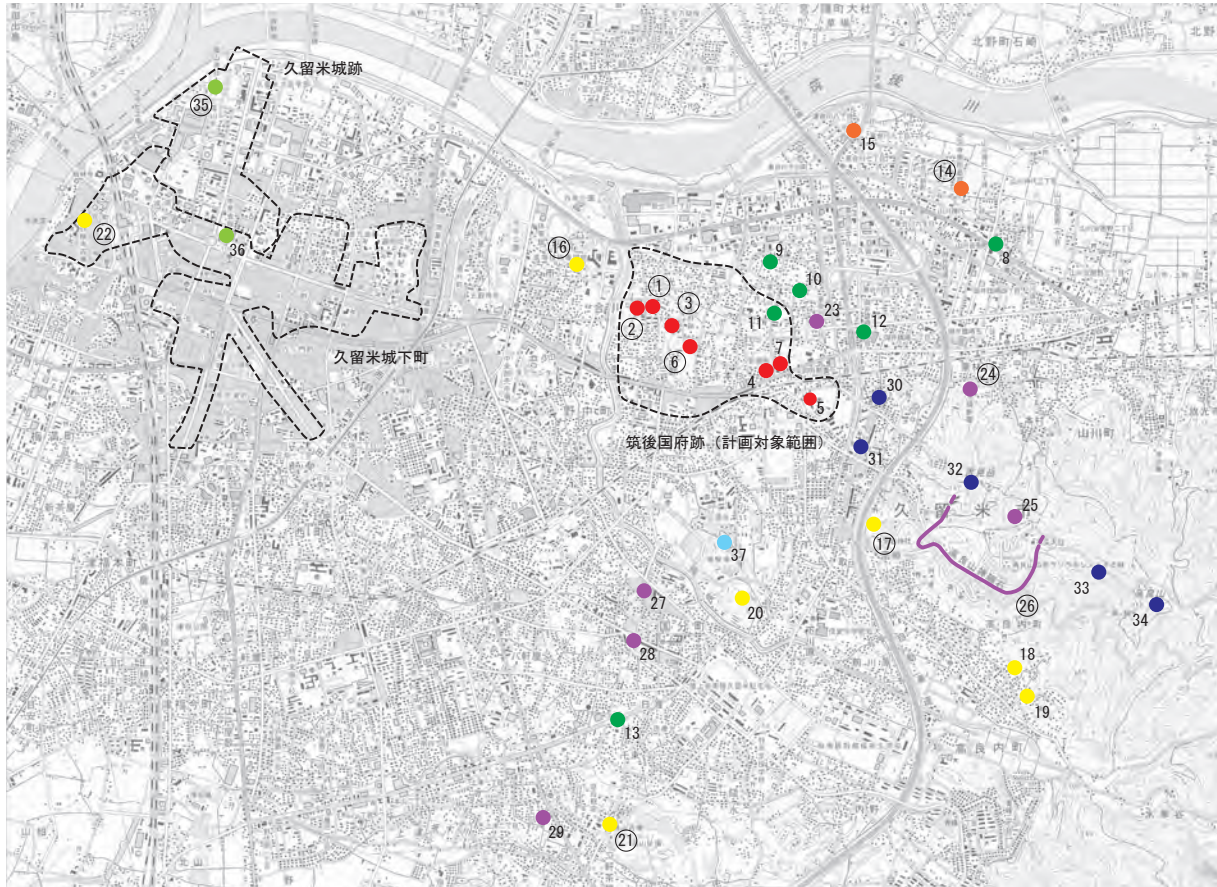
図 2-3-17 陸軍橋（陸軍関係遺構群）



図 2-3-18 遥拝台（陸軍関係遺構群）

2. 主要文化財の分布

前項の歴史の変遷で触れた筑後国府跡周辺の主要な文化財の分布を以下に示す（図 2-3-19）。



1. 前身官衙 2. I期政庁（古宮遺跡） 3. II期政庁 4. III期政庁（朝妻遺跡） 5. IV期政庁（横道遺跡）
6. 国司館 7. 在国司居屋敷 8. 野口遺跡 9. 西小路遺跡 10. 水洗遺跡 11. 上遺跡 12. 神道遺跡
13. 正福寺遺跡 14. 安国寺甕棺墓群（国指定史跡） 15. 新府遺跡 16. 市ノ上東屋敷遺跡（県指定史跡）
17. 祇園山古墳（県指定史跡） 18. 大谷古墳群 19. 岩竹古墳群 20. 隈山古墳群 21. 浦山古墳群（国指定史跡）
22. 日輪寺古墳（国指定史跡） 23. ヘボノ木遺跡 24. 山川前田遺跡（水縄断層・国指定天然記念物）
25. 高隆寺跡 26. 高良山神籠石（国指定史跡） 27. 筑後国分尼寺跡（推定）
28. 筑後国分寺跡 29. 上津土塁跡 30. 二本木遺跡 31. 安養寺境内遺跡 32. 吉見岳城 33. 杉ノ城
34. 毘沙門岳城 35. 久留米城本丸（県指定史跡） 36. 両替町遺跡 37. 陸軍関係遺構群

● 筑後国府関連主要遺構 ● 縄文時代 ● 弥生時代 ● 古墳時代 ● 古代 ● 中世 ● 近世 ● 近代
 ※ 図中の○数字は指定文化財。遺構の時代が複合する遺跡は代表的な時代で示す。

図 2-3-19 筑後国府跡周辺の主要文化財分布図（1/50,000）